

平成25年度 自己評価表(結果)

学校番号	学校法人静岡理科大学 静岡北中学校	記載者	森竹健治
------	-------------------	-----	------

学校教育目標	将来のScienceとSocietyを牽引できる存在感と思慮深さを持った人材の育成	【総合評価】 総合評価は中程度にとどまったが、今年度の傾向として、生徒募集やSSHなどの外部発信的なところに関しては、高い評価をすることができた。しかし、その一方で、中高の連携や内部的な側面における点については、高い評価をする教員と低い評価をする教員に分かれた。定量的な数値だけで、教育活動を図ることはできないが、内部における情報共有と実践の面で反省点が残る1年であった。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望をもち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる			
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
1 募集定員の必達		5	募集定員60人に対して64人の入学生を得ることができた。	募集定員を確実に充足するためにも、今年度以上の受検者数を増加させる。
2 進学実績の向上		3	ベネッセの学力推移調査では、各学年共に右上がりの成績を収めているが、上位層と下位層の差がある。	理数科、国際コミュニケーション科へ進学する学力の目標値が明確になってきたので、個々の生徒の学力を確実に伸ばす。
3. 法人傘下の中学校として使命を果たす		4	SSHの成果発表会などでは、高校生に引けを取らないプレゼンテーションを行い、高い評価を受け、高校での活躍を期待されるものができた。	今年度の3年生が残した成果以上に、次に続く生徒たちが高い成果を残していけるようにすることが必要。
4. 国際化教育を充実させる		4	浜松日本語学院やオーストラリアの中学生たちとリアルタイムに会話する機械などを得て、英語に触れる機会を多く得た。	今年度以上に、生きた英語に触れる機会を多く設定できるように努める。
5. 中・高6カ年一貫教育を充実させる		3	2年次から高校進学先の学科を意識させる機会を設けたが、中高連携教育推進委員会を機能させることができず、高校との連携が薄かった。	高校との連携強化をしながら、高校進学後に中核となって活躍する内進生としての資質を育てるようになる。
6. 特色ある理数教育を推進する		4	国際フォーラムや成果発表会などでは、高校生に引けを取らないプレゼンテーションを行い、中学生の研究成果を発表できた。	SSH活動における研究レベルの向上と研究成果での受賞歴を上げること。また、高校との共同研究チームの活躍を、より活発なものにする。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	評価	成果と課題	次年度の取組
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	SSH活動を精査することで、確実に中学レベルを超える研究活動実績を残すことを目標とする。また、CASEや言語技術プログラムのエッセンスを、各教科学習の中に活かす。	中学生対象のプログラムとしては各学年に適した活動・実績がなされた。ただし、通常の授業との兼ね合いで更なる工夫が求められる。	4	SSH活動が中学校のプログラムとしてはいつて2年目になり、各学年において学年相当のプログラムをこなすことができ、中学レベルを超える評価される成果を残せた。CASEや言語技術のエッセンスは、徐々にSSH活動や各教科学習の中に反映されつつある。	SSH活動だけでなく、他の学習活動や生徒の活動においても社会的な評価を得られるような取り組みを積極的に行っていくことが必要。その中で、本校独自の更なる教育プログラムを模索していく。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画・指導、課題実施、学習状況把握	昨年度の反省をいかり、中学校と高等学校の意見交換・意識の共有化を、中高連携教育推進委員会で議論をし確実に図る。	完成年度を迎え、3年生が高校進学をして行く中で、先取り教育を実施した。ただし、中高連携教育推進委員会での議論がうすく、相互理解に関しては十分な成果を得られなかった。	3	第2期生は、個々の目標にあった学科に進学することができた。しかし、中高連携推進委員会を中心とした高校との意見交換の場、あるいは意識の共有化に関しては、確実に行うことができなかった。	第3期生を高等学校に送り出すにあたり、高校側との関係を密にするよう、会議体も一緒に運営するようにし、互いの状況がいまどのようになっているかといったこと、更には双方に対する関心を高める。
生徒指導	健全な高校生活をおくれるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもと確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	学年部単位での個々の生徒に即した生徒指導を行いつつ、生徒の実態把握を全教職員が確実に行えるように、情報を共有化する体制を作る。	学年部ごとに、個々の生徒の実情に応じた指導をすることはできたが、学年間での生徒情報の共有と生徒間の相互理解に関しては、反省点が残る。	3	学年部での個々の生徒指導に関しては、よく先生方の指導の跡がうかがえたが、多感な時期の生徒を相手にしているため、短期間に効果を上げることはできなかった。情報を共有したものの、全体での指導に関しては、課題が残った。	個々の生徒の状況把握を、全教員が確実にを行い、直接に関係する教員だけがかかわるのではなく、学校を上げて一人ひとりの生徒の成長を促す指導体制を作る。

進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望に即した緻密な指導を実施する。また、本校独自のキュリア教育を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応、	今年度における最終学科選択の時期を見直した計画の通り、確実な進路指導を行う。また、先取り学習に関する再検討も行ったので、その計画にそって実施する。	完成年度とすることで、計画的に高校への進路指導を進めてきたものの、やはり、まだまだ中学生年代なので、学年部等で綿密に指導をされたにもかかわらず、土壇場まで学科選択の変更が生徒や家庭から持ち上がってしまう難しさがある。	3	昨年度の反省の通り、最終的な学科選択の時期を下げたものの、最後まで気持ちが揺れる生徒は残ってしまった。先取り学習に関しては、計画通りに実施できなかった点に反省が残る。	早い段階において、3年生の学習状況や進路希望に関する情報に関して、高等学校側と情報を共有化し、個々の生徒にとって一番ベストな進路選択ができるような指導体制を作る。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険箇所の定期的な点検、スクールバスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行	今年度確立したシステムをもっと日常の教育活動の中で活用していく工夫を確立していくことが必要。また、保護者からの意見を吸い上げるような活用方法も検討する。	安否情報確認システムとは別に、中学校として保護者に対する電子メールでの連絡体制を構築した。これにより保護者への情報伝達のための手法を作り出すことができた。	3	学内だけで利用する保護者一斉メールを、機能させることができ、行事などの連絡方法として利用することはできなかったものの、保護者からの意見を吸い上げるような活用方法まで検討できなかった。	保護者の協力のもとにメールアドレス登録を行っているものの、保護者の保有するキャリアの問題、メール設定の問題などで100パーセントの保護者に一斉配信のメールを送れない状況が、早く改善する。
保健管理	生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療報告を確実に行う。また部活動の活性化を図る。	検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化	年間行事で計画された検診計画を確実に実施し、引き続き文武両道の両面での成果を上げていく。	SSH活動成果での入賞はなかったが、外部でのシンポジウムから招へいされ報告を行ったり、研究助成資金を得ることができた。また、運動面においては、ゴルフの国体選手選抜や空手のアジア大会、全中での優勝などの成果を残した。	3	年間行事計画にある各種新計画は、予定通り実行された。部活動の成果としては、空手道部が昨年に引き続き全国大会出場の結果を残し、バドミントン部も中部の中学校の上位行に位置付けられるような成績を残すまでに成長した。	引き続き、生徒の健康管理に関する体制を整えと共に、運動部のみならず文化的な活動についても積極的なアプローチをしたい。
特別支援教育	「知・徳・体」のバランスのとれた力(キーコンピテンシー)の育成をすべく教育プログラムを展開する。	CASE、言語技術教育、SKS、キャリアデザイン教育プログラムの展開	CASEや言語技術に関しては、本校教員が考えたオリジナリティーなプログラムを積極的に外部発信していく。また、ICT教育についても、教育改革の柱となっているので、今後を見据えた利用方法を発信していく。	言語技術・CASEといった、本校の基盤となるプログラムに関して、大学や研究機関との連携を深めることはできなかったが、学内で独自に独自性を持ったプログラム展開を授業で行うことができた。ICT教育に関しては、活用範囲が徐々に広がりを見せてきた。	3	CASEや言語技術に関するプログラムを外部に発信することはできなかった。ICT教育に関しては、個々の教科担当が自分の考える教授法の中で利用していく状況が見られた。	選ばれる学校になっていくためにも、特色ある木養育プログラムに関しては、さらに研究を深め本校のオリジナルのスタイルを作り上げ、それを外部に発信し、評価を受けていくことが必要。
組織運営	組織的な校務分掌体制を整え、規律をもって教職員が服務を全うする。また計画的な予算編成を中長期的な観点から行い、日常の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報に関する管理、公文書管理を適切に行なう。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の編成及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立と効果的な活用	中学・高校共に教員の教務が多忙であるが、定期的な情報交換を行う体制づくりをしていく。	中高一貫教育推進委員会を中心とした、中学校と高等学校の情報交換・共通理解を密にしていって体制づくりを求めたものの、今一つ軌道に乗りきれないといったところに反省点が求められる。	3	中学における会議形態としてある中学部会、教科担当部会、運営・職員会議、成績会議などは定期的に行われ情報交換は行ったものの、高校教員との情報の流れがあまりよくなかった。	高校と運営委員会・職員会議を合同で行うように会議形態を変化させ、中学での案件は、中学部会で検討したうえで、運営会議に諮っていくといったスタイルに変えていくことで、高校教員との情報共有を、しやすい会議形態に移行する。
研修	学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、郊外研修への参加、研修報告会の実施	第三者による分析勉強会において、外部からの問題指摘を確実にやっていくと共に、内部で問題意識を共有し、課題解決に向けてどのような体制づくりや学習指導を実践していくかを確実に検討・実践する。	学力推移調査の分析は確実にやってきたが、生徒たちの現状の学力に関する課題を明らかにするとともに、対策を実行していかなければならない。	3	内部での分析検討会は、学期に一回行うようになってきたが、外部からの問題指摘の機会が少なくなりました。	内部・外部による学習に関する取り組みに関する分析・検討を定期的に行いながら、生徒の学力向上のために、自分たちが次に何を目標としていくべきかを、常につかんでいる環境を作る。
保護者、地域住民との連携	学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を受け入れながら、更なる本校の発展を目指す。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外しつての学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	保護者からの要望を精査し、今学校に対してどのようなことが求められているかに関して、教員間で情報を共有すると共に、保護者に対して情報を開示し、より強固な体制づくりのために協力を求める。	授業参観、三者面談、懇談会などの機会を通じて、学校に対する要望・意見を吸い上げることはできた。	3	多種多様に及ぶ保護者からの要望を精査し、その中でいかに対応していくかについては、個々のケースごとに考えていくことができた。保護者との協力関係に関しては、大方よい関係を作り上げたが、一部問題を抱えた。	地域に根差した学校となるためにも、地域住民との交流をする機会を作りながら、学校に対する意見・評価を聞く機会を設ける。
施設設備	施設設備の美化と定期的な点検を確実にし、安全管理に努め、生徒たちにとって学習環境を整備する。	効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用	従来、図書館を活用することがなかった生徒たちへの啓発を行うことで、更に活字を読むことになれる学習環境を整える。	生徒たちの読書量は、図書館の利用率からして、かなりの生徒たちが図書館を有効活用することができた。	3	高校生と比較して、中学生の図書館利用率は高いものがあった。また、日常の教育活動においても、SSH活動における理科室やパソコン教室の利用を、積極的に行った。	様々な学校施設を、生徒たちの教育活動において、効率よく有効活用する。
				総合評価	3		